

より一層の信頼の醸成を目指して、 食品安全委員会は4年目の 新体制へ。

食品安全委員会は平成18年6月末で設立3年が経過し、7名の委員の任期が満了。これに伴い委員の改選が行われ、衆参両議院の同意を得て、7月1日付けで常勤委員4名、非常勤委員3名の任命が行われました。今回の特集では、食品安全委員会のこれまでとこれからを、委員それぞれからのご挨拶の形で紹介します。



国民の健康の保護を最優先に、課題に対処。

食品安全委員会委員長 寺田雅昭(再任)

〈毒性学の分野:国立がんセンター名誉総長、前(財)先端医療振興財団副理事長〉

委員として再任され、また、今回も委員長として新たな体制で委員会運営に取り組んでいくことになりました。この3年間、食品安全委員会はさまざまなリスク評価を着実に実施してきましたが、引き続き、食品安全基本法に基づき、国民の健康の保護を最優先に、種々の課題に適切に対処していくことが重要と考えております。同時に、リスクコミュニケーションについても更なる推進を図っていきたいと考えております。今後も科学的知見に基づく食品安全行政の確立に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

未消化のジレンマを 超えて行きたい。



食品安全委員会委員
委員長代理

見上 彪(再任)

〈微生物学の分野:
東京大学名誉教授、
前日本大学生物資源科学部
獣医公衆衛生学研究室教授〉

本当に試行錯誤の3年間であり、相当未消化に終わったのではないかと自分自身では判断しています。特にリスクコミュニケーションでは、科学的には間違いないと思えることでも消費者にはそう伝わらないジレンマが悩ましいところでした。解決策はなかなか難しいのですが、カロリーベースの食料自給率が40%の国で100%の食の安全を求める人が多い状況の中、これからの3年間、リスク評価の可能な限りの効率化の課題等とも合わせまして、なるべくストレスをためないように考えながらやっていきたいと思っています。

消費者の科学的安心の 実現を目指す。



食品安全委員会委員
小泉直子(再任)

〈公衆衛生学の分野:
前兵庫医科大学教授〉

リスク評価については、今後、農薬等のポジティブリスト制度に係る諮問の増加もあるため、より効率的な評価の進め方について、新体制の中、基準となる評価手法を考えるべきではないかと思っています。また、これまでは定性的評価が主であった観もありますので、統計学あるいは推計学といったものを取り込んだ定量的評価を行うように努力すべきかと思っています。最も難しいのは、やはりリスクコミュニケーションですが、これについては科学的な安全と消費者の感覚的安心を可能な限り近づけることができればと思っています。

食における化学物質の 信頼を高めたい。



食品安全委員会委員
長尾 拓(新任)

〈化学物質(有機化学)の
分野:前国立医薬品食品衛生
研究所長〉

私は有機化学を専門とし、医薬品の開発や、毒性学、医薬品と食品の安全性の研究等に関わってきました。こうした知識と経験を生かし、いろいろな面でお役に立ちたいと思っています。一般に化学物質は危険視されがちですが、一方では、非常に改良が容易な領域でもあります。改良によって安全性も高めていけるわけですから、しっかりとリスク評価をしていくことで、おおいに人類に役に立つものになると考えています。そのためにも科学的な知見に基づき、評価に取り組んでいきますので、よろしくお願いいたします。

退任委員から

日本から世界へ、
独自性ある情報の発信を。



前・食品安全委員会委員
委員長代理
寺尾允男

この3年間は食品安全委員会が役割を果たすために、必要な体制・機能というものを整備するための期間ではなかっただろうかと、私は思っております。次の3年間は、これも私論ではありますが、日本で行った食品の安全性の評価結果、あるいは日本の考え方など独自性のある情報を、積極的に世界に発信していく体制を整えていく必要があるのではないのでしょうか。現在、日本は欧米とともに、食や医薬品の安全の分野で重要な位置を占めているわけですが、こうした体制を維持して行くためにも、皆様のご尽力を希望してやみません。

消費者にも安全を
判断する実力を期待。



前・食品安全委員会委員
坂本元子

大変責任の重い役割を終了いたしました。正直なところほっとした気持ちです。委員会では、リスク評価のための膨大な情報の収集、集めた情報の信憑性の議論、それをまとめる作業など仕事の大変さを目の当たりにしてきた3年間でした。食の安全に関するリスク分析は今後ますます重要性を増してきます。今後の委員会ではリスクコミュニケーションの在り方など、まだ研究の必要があるかと思いますが、消費者の皆様ご自身にも食の安全性を判断する実力をもっとつけて頂けることを願い、退任の挨拶とさせていただきます。

「わかりやすく伝えること」
の議論を望む。



前・食品安全委員会委員
中村靖彦

この3年間に行った238のリスク評価については、十分自信を持って国民の皆さんに示すことができるものだと思っています。ただ、その内容はまさに「科学」であって、これを庶民感覚でわかりやすく伝えられたかどうか、こなしきれなかった部分も多かったという思いを、委員会の中の唯一の文科系委員として残しています。私自身、この「わかりやすさ」の課題には十分な対応もできずに去るわけですが、できれば、これから引き続きこの仕事を続けていかれる方々に、こうしたことも議論していただければと願っております。

食の安全確保には、
科学と技術、そして理解を。



食品安全委員会委員
本間清一(再任)
〈生産・流通システムの分野:
東京農業大学教授〉

私は農産物における加工・貯蔵といった分野を専門にしています。これは、食品の材料に含まれる有害要因をとり除き、食品を長い間安全に保つために必須のものであります。

また、リスクコミュニケーションについては、常に緊張感を持って臨んできましたが、国民の食品安全委員会への期待も感じましたし、何より国民が消費者としての関心や疑問を、個人として社会的な機能を持つ場で発言することを促進したという面でも効用があるのではないかと評価しています。

科学の「安全」を人々の
「安心」につなげる。



食品安全委員会委員
野村一正(新任)
〈情報交流の分野:
前(株)時事通信社解説委員、
(株)農林中金総合研究所
顧問〉

長い間マスコミで働いてきました。情報交流、あるいは農業・食糧問題を専門としています。科学的な見地から食のリスク評価を行い、安全な食生活を図る食品安全行政は画期的なものだと思いますが、食の安全、あるいは国民の健康な生活を本当に保障していくには、科学者が見極めた「安全」を、人々が生きていくうえで「安心」につなげる必要があります。そのためには食品安全委員会への国民の信頼の醸成が最重要課題のひとつだと考えております。私自身、今後そういう面で、お役に立てればと思っております。

消費者に近い立場から
食の安全を見守りたい。



食品安全委員会委員
畑江敬子(新任)
〈消費者意識の分野:
和洋女子大学教授〉

私は調理学を専門とし、米や魚などの食材と日本人の生活との関係について研究するなど、日本人の食生活を考えてまいりました。また、大学の生活科学部や家政学部というところにおりまして、現場で食に関する教育にも関わるなど、おそらくこの委員の中では最も消費者に近い立場にいるのではないかと思います。このような経験や観点から、一般の消費者の皆様視点に立ってリスク評価やリスクコミュニケーションに関わっていくことで、食の安全・安心の推進にお役に立てればと思っております。よろしく願いたします。